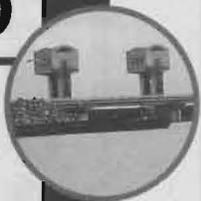


なぜ諫早の水門は開かないのか

干拓を推進する 御用学者の罪状



九州の有明海を死滅させつつある諫早干拓事業は、『農水省版薬害エイズ事件』
と言える。御用学者が、諫早湾、ひいては有明海を死の海にする危険性を
過小評価し、干拓推進のお墨付きを農水省に与えたからだ。

横田 一

三月三日、有明海のノリ不作の原因究明と対策を話し合う「第三者委員会」（正式名称、農林水産省有明海ノリ不作等対策関係調査検討委員会）が東京都内で開かれた。委員は、一人の学識経験者と、四人の有明海沿岸の漁業代表者の一五人（下の名簿参照）。

午後一時、まず清水誠東京大学名誉教授が委員長に選任された後、ノリ不作の実態や原因究明の手がかりになるデータが淡々と紹介されていく。二時すぎ、そんな気怠い説明を打ち破るように、参考人として出席していた漁民の梅崎義己氏（福岡県久間田漁協組合長）が熱っぽく訴えた。「タイラギが存亡の危機に瀕

し、プランクトンの異常発生でノリが色落ちもしている。有明海の漁業の不作・不漁と干拓事業の時期は一致しており、因果関係は明らかだ。ただちに工事を中止すべきだ」

学識経験者には、漁民の訴えを積極的に支持する人もいれば、正反対の意見の人もいた。その中で際立ったのは、戸原義男九州大学名誉教授（六八歳）。水門開放の悪影響を強調し、干拓事業継続を声高に訴えたのだ。

結局、清水委員長はこうした慎重派に配慮する形で、「水門開放の意味や影響を把握する必要がある」と判断。谷津義男農水大臣も結論先送りという委員会の意向を尊重した。

漁民に失望と不信感が広がった。谷津大臣は、「二人でも（水門開放と）言えば、開けざるを得ない」という発言を二日で翻したからだ。

「薬害エイズ事件の 安部教授のような人」

水門開放反対を強く訴えた戸原名誉教授は、一体、どんな人物なのか。

調べてみると、当初から諫早干拓事業推進に深く関わっていることがわかった。手がかりは、鮫島宗明代議士（民主党）の国会質問だった。

「これはある意味では、薬害エイズにおける安部（英）教授のような人がある。この（諫早干拓事業の環境）アセスメントを仕切っているところに含まれている。かなりこのクロに近しい人が誰だというのは大体予想がつきますけれども、

地元の水産関係者では有名な水理土木の教授でございませう」（二月二十七日の環境委員会）

ここで登場する環境アセスメント（一九八六年と九一年に行なわれた）こそ、漁民をだまし干拓事業を推し進めた詐欺的文書だ。工事は漁業に「多少の影響」を与える程度とい

う楽観的な記述が並んでいるためだ。「潮受堤防の設置及び調整池の供用が諫早湾内の貝類には多少の影響を及ぼすものの、他の有明海の貝類にはほとんど影響を及ぼすことはないものと考えられる」「他の有明海のノリ漁場については、潮流速等の環境変化がほとんどみられないので、ノリの生育や生産などに影響を及ぼすことはないものと考えられる」

農林水産省有明海ノリ不作等対策関係調査検討委員会委員

氏名	役職	専門分野
東 幹夫	長崎大学教授	水域生態学
荒牧 巧	福岡県有明海漁連代表理事長	漁業者代表
磯部雅彦	東京大学教授	海岸工学
井手正徳	熊本県漁連代表理事長	漁業者代表
川端 勲	長崎県漁連代表理事長	漁業者代表
鬼頭 鈞	水産大学校教授	藻類学（ノリ栽培）
清水 誠	東京大学名誉教授	水産資源学
須藤隆一	埼玉環境科学国際センター総長	環境微生物学
瀬口昌洋	佐賀大学教授	浅海干潟環境学
滝川 清	熊本大学教授	海岸環境工学
戸原義男	九州大学名誉教授	水環境工学
原 武史	日本水産資源保護協会専務理事	水産増殖学
本城凡夫	九州大学教授	赤潮、プランクトン
松田 治	広島大学教授	水圏環境学
山崎龍馬	佐賀県有明海漁連代表理事長	漁業者代表

（五十音順）

三月三日、「回目的第三者委員会を終え、会場を出る戸原義典氏。取材を避け、足早に立ち去った。

しかし実際には、諫早湾内の貝類は激減。有明海の漁業にも悪影響を与えたのは確実だ。こんな現実離れをしたアセスをまとめた学者は「安部教授」にたとえられても仕方がない。このアセスの内容を検討した研究者こそ、前述の戸原名譽教授なのだ。

戸原氏は、佐賀大学教授から九州大学農学部教授を経て、九六年に退官後、九州大学名誉教授となっている。戸原氏が九州大学教授の時にいた研究室は「排水干拓工学研究室」(現在は「農学部水環境学研究室」)で、なんと三〇〇〇万円に近い農水省の受託研究をしていた。詳細は次の通りだ。(合計二九二九万円)

- 一、「諫早湾干拓事業潮受堤防の築堤に関する研究」
九〇年、九一年 八六六万円
九二年、九三年 八六六万円
- 二、「有明沿岸地域調査(干拓堆積関連調査)」
九〇年、九一年 一五〇万円
九二年 一五〇万円
- 三、「諫早湾干拓事業潮受堤防の築堤工法に関する研究」
九四年 八九七万円

普通、理工系大学の研究は、旧文部省の科研費で行なわれることが多

い。また農水省は自前の研究機関を持つているため、外部への受託研究は特別な場合に限られる。そんな例外的な研究を戸原氏は受けていたのだ。

その一方、干拓事業が環境にどれくらい影響を及ぼすかを予測するアセスメントにもかかわらず、一人二役とはこのことだ。野球でいうなら、プレーヤーと審判を兼任するようなもので、公正公平な判断が下せるとは思えない。

さらに戸原氏は、農水省の「諫早湾干拓調整池等水質委員会」の委員長も務めていた。この委員会は、潮受け堤防内の調整池の水質が悪化したため設置されたが、委員の意見が削除される「議事録改竄」が行なわれた胡散臭い会だった。(二〇〇〇年六月一日付「朝日新聞」)

要するに現実離れたアセスの作成に関わり、農水省の受託研究もしていた戸原氏が、今回の第三者委員会の委員を務めているのだ。その初会合で水門開放反対、事業継続を訴えたのは、深く関わった干拓事業を否定したくなかったためだろう。

これに対し戸原氏はこう反論した。「受託研究は全国唯一の干拓工学の研究室であったため、アセスとは無関係。アセスの検討委員をしたのは確かだが、私は下っ端で仕切ったわけではなく、安部教授とは違う。干拓事業と漁業被害の因果関係も不明で、これから明らかにすること。水質委員会の改竄も委員の意見の二

ユアンスが若干違っただけの話だ」 農水省と長崎県の 情報出し渋り

葉害エイズ事件では厚生省(当時)の資料が後になって出てきたが、諫早干拓事業でも農水省や長崎県が情報を出し渋りをしてきた。潮受け堤防着工から四年後の九三年、諫早湾入口に面した長崎県小長井町の森文義氏(漁協元組合長、注)は、「このままでは、諫早湾だけでなく有明海全体に漁業被害が広がる。干拓工事はすぐに中止すべきだ」と訴えた。湾内で採れていた高級貝のタイラギが激減し、その原因究明のためには「漁場調査委員会」の席上でのことだ。

しかし森氏の警告は無視され、干拓事業は止まらなかった。九七年四月に潮受け堤防の水門が閉じられる



3月1日、農林水産省前で行なわれた漁民のデモ。

と、今度は湾沿岸部のアサリ養殖が大打撃を受けるなど、諫早湾内の漁業は壊滅状態に陥っていった。

そして森氏の予言は現実のものとなった。ノリ不作などの漁業被害が有明海全体に広がったのだ。森氏はこう指摘する。「農水省は『今から原因究明をする』と言っていますが、諫早湾の漁業被害については八年前から調査をしているのです。ところが未だに調査結果は公表されていません」

このあまりに遅い対応が、諫早湾ひいては有明海を死の海にした元凶に違いない。農水省や長崎県は、工事による環境悪化や漁業被害をひた隠しにして、干拓事業をゴリ押しした可能性さえある。

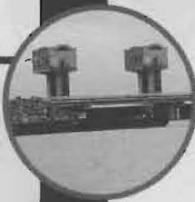
諫早湾から有明海全体に広がった漁業被害の責任を農水省はどう取るのか。第二回の第三者委員会(三月一三日)では、水門開放の方法や工事中断時期などが焦点になったが、干拓事業を推し進めた農水省と御用学者の責任追及も忘れてはならない。

(注) 諫早干拓事務所立花貴所長(農水官僚)が、最後まで干拓事業に反対した森氏に「買取工作」を持ちかけたことが発覚している。立花所長(当時)は森氏を所長室に呼び、「ゼネコン一〇社が(森氏を)技術顧問として月七〇万円を受け入れたと言っている。この場で即答して欲しい」ともちかけたというのだ(森氏は拒否)。二月二七日の農水委員会民主党の佐藤謙一郎代議士がこの買取工作について質問、谷津農水大臣は「事実確認できない」と答弁した。なお立花氏は干拓事業の落札業者「藤村建設」に天下り、現在は常務執行役員。

32ページの水門の写真撮影/水尾俊彦 他は筆者よこたはじめ・一九五七年生まれ。ジャーナリスト。

なぜ諫早の水門は開かないのか

農水省の策略に 追い込まれた農民



諫早湾沿岸には、排水不良や高潮対策をなおざりにされ、干拓が完成すれば、すべて解決すると思いつまされてきた農民がいる。彼らも、干拓事業に翻弄されてきた犠牲者だ。

永尾俊彦

「バカゴロウ」——一九九七年四月、諫早湾があの「ギロチン」で閉め切られたとき、テレビ番組「ニュースステーション」の久米宏キャスターは、諫早湾のシンボル・ムツゴロウが死滅させられていくのに潮止めを喜ぶ地元農民を、こう呼んだ。

この発言は農家の人々の人格を侮辱している点で論外だが、あの時、世論の猛反発を浴びた諫早湾干拓事業にしがみつく沿岸低地帯の農民を主に都会人が非難がましい目で見ていることは確かだ。

長崎県諫早市小野島の徳永哲さん（七十二歳）に当時、東京の見知らぬ人から突然、「低い所に住むのが悪い。上に移れ」という内容の電話がかかってきた。名前が報道されたので電話帳で調べたらしい。そういう電話をかけてきた人が三人もいた。徳永さんは、「先祖の代からここに住んでいるのに、『低か所に住むのが悪か』はおかしな話ですもんね」と憤っていた。ほかに、数人の農民から同じような話を聞いた。

そして、閉め切りから四年後の今

年に入って、有明海の海苔の大凶作は干拓のせいだとする福岡、佐賀、熊本

の漁民が実力で干拓工事の現場を封鎖したことをきっかけに、干拓中止を求める世論が再び高まり、農林水産省は工事の中断を決めた。

干拓地特有の苦労は 干拓で解決

危機感を持った沿岸の農民たち約六〇〇〇人は三月一日、工事の中断と水門開放に反対する総決起集会を開いた。水門を開けることになら、こちらでもまた実力阻止も辞さないとの構えだが、世論やマスコミは干拓の犠牲者である漁民に同情的で、干拓を望む農民には冷淡だ。

しかし、これだけ「無駄な公共事業の象徴」と批判されても、干拓を

切望する農民の置かれてきた状況とは、一体どんなものだったのだろうか。

地元農家のリーダーで、長崎県森山町の町会議員でもある西村清貴さん（五一歳）と、父親の勇雄さん（七七歳）宅を訪ねた。

西村さん一家は、干拓で形成されてきた諫早平野の中でも、もっとも新しい戦後の干拓地である森山干拓に六三年に入植した。三五〇ヘクタールの干拓地に入植したのは、主に長崎県の離島や山間地などから集まった四六戸だった。

勇雄さんは入植前、明治時代の干拓地である同じ森山町の本村名に住み、八反（約八〇アール）の水田で米を作っていた。だが、「食糧増産が叫ばれよったし、八反ではメシは食われん」と、一戸あたり三ヘクタールもの農地が安く手に入る新干拓地に入植した。

しかし、入植して四、五年目ごろ



から、ガタ（干潟の粘土質の土）の堆積で排水不良が始まった。せつかく植えた稲の根が腐り、田植えを三回やり直したこともある。「排水に一番泣かされたですわね」と勇雄さんは、ふりかえる。

冠水した水を強制的に干拓地の外にはき出す排水ポンプの運転管理も、干拓農民の苦労の種だった。水が引くまで三、四昼夜、ポンプに張りつかなければならない。

また、干拓で開けた諫早平野は水源となる後背地の山林に乏しく、農



ひびができたり曲がっても、放置されてきた旧干拓地の海岸堤防。右が農地で左が干潟。

業用水を地下水に頼らざるをえないので地盤沈下もひどい。諫早市から森山干拓に向かう国道五七号線は、あちこちに陥没した穴があいていた。

さらに塩害の苦勞もある。地元の人々は「潮花」と呼んでいるが、台風によって竜巻のように巻き上げられた海水が、稲にかかる。すると稲は潮で真っ白になり、枯れてしまうのだ。おまけに高潮と洪水の不安もある。清貴さんは、これら干拓地特有の問題を一挙に解決してくれるのが、この諫早湾干拓事業だと言う。

海拔七メートルの高さの潮受け堤防があれば、高潮と塩害は防げる。



なにより、潮受け堤防で諫早湾を閉め切ってしまうと、その内側は干満の差がなくなる。そうすればガタの堆積もなくなり、潮受け堤防の内側の調整池は海拔マイナス一メートルに水位が保たれるからいつでも排水ができ、洪水に高潮が重なっても調整池に洪水を貯めておける。また、調整池の水を農業用水にも使うので、地下水に過度に依存することもなくなり、地盤沈下も防げる、というのが清貴さんの説明だ。



森山町の干拓農家。前面には田んぼが広がる(上)。この地で農業を営む西村さん親子(右)。

しかし、西村さんたちは最初から干拓賛成ではなかった。副業の海苔養殖が好調だったからだ。米の収入が年間三四〇万円ほどの時、海苔は六〇〇万円になったこともあった。そのため、西村さんたちの森山漁協も、当初は猛烈に反対した。排水不良の苦しみより、海苔養殖のもたらす高収入の魅力が勝っていたのだと勇雄さんは打ち明けてくれた。ただ、勇雄さん個人の気持ちとしては、一貫して干拓賛成だっ

た。というのは、海苔以外の漁獲量が落ち込み、諫早湾の漁業の将来に展望を見出せなくなっていたからだ。そして、なによりも自分は漁民ではなく農民であって、「土地は生産基盤として絶対になくしてはならない」との思いがあった。その土地の排水不良を改善する事業は、是非やってもらいたい。海に向かって干拓地が伸びていけばいくほど、その手前の干拓地は水はけのよい「一等田」になると勇雄さんは言う。これこそ長年、干拓とともに歩んできた干拓農民の信念だ。

「反対運動に振り回された」

しかし、排水不良や高潮などの対策なら、費用も安い既設の海岸堤防の補強や排水門の拡幅、排水ポンプの増設などで対応できる。事実、佐賀県の干拓地ではそうしている。また、諫早で干拓を望んできた農民たちも、減反時代の当時、農地がほしかったわけではない。

それなのに、なぜ貴重な干潟をすべて消滅させる三五五〇ヘクタールもの大規模干拓を農民たちは容認してしまうのだろうか。森山漁協の解散記念碑にはこう記されている。

「(前略) 昭和六十年になって諫早湾防災干拓事業として三度び復活、時の高田知事より再び(漁業権放棄の)強い要請を受けるも、漁業への愛着の念をお捨てがたく、漁民の悩

みは深かったが、遂に地域の防災と郷土の将来の発展に鑑み、忍び難きを忍び、県政に協力してその礎石となることに意見の一致をみて、昭和六十一年九月漁業補償協定に調印して、諫早湾における先祖より継承された漁場の一切の権利を放棄した」(かっこ内は筆者)

森山町に知人の多い地理研究家の沼礁一郎さんによると、干拓地特有の水不足による共同の水管理や排水不良対策でも共同作業が必要なため、「異論が出にくい地域構造」が行政に対して従順な理由の一つだと言う。そして、「せっかくお上が大規模干拓をやってくれと言っているのに、「防災対策だけやってくればいい。農地はいらない」とわがまま言っちゃいけない」となる。

さらに、この「わがまま言っちゃいけない」という意識が、「自分は本来、農民だ」という意識と結びついて、行政から地域の防災のために協力してくれと言われると、「海苔はあきらめて閉め切ってもらったほうがいい」という考えになったと沼さんは見ている。

解散記念碑の「忍び難きを忍び、県政に協力してその礎石となる」という言葉には、森山の人々の苦渋に満ちた意識が極めてよく表れている。そして、戦後すぐの五二年以来、大規模干拓の計画があったために、「干拓ですべてよくなるから」と既設の海岸堤防の補修などは、なおざ

りにされた。長崎県議会で高田勇知事(当時)は九六年、こう答弁した。「干拓というものをやるがために、周りの海岸堤防というものはそのまま放置しておいたのであります」

農民たちは、ますます干拓に期待せざるをえなくなっていた。

そして、「(干拓完成まで)あと何年やけん、あと何年やけんと言いながら耐え忍んできました」(森山干拓に住む橋川澄男さん、五〇歳)。

そういう行政の「怠慢」に対して干拓農民は、「耐え忍ぶ」だけで、強硬に排水不良の改善とか、堤防の強化などの要望を行政につきつけなかった。それは清貴さんによれば、「行政の怠慢と言えばキリがない」からだ。この干拓事業の防災効果が十分なこととは清貴さんも承知している。九七年七月の大雨の際には、排水ができず、「本明川の水が逆流してきた現実があった」し、九九年七月の集中豪雨では諫早市内の九割の世帯に避難勧告が出された。また、この事業をめぐる「政官財の癒着」があるとも感じている。

それでも「何事も完璧なものはないと思うけん」と、現実が改善されたことを喜んでいたのである。

だから行政に対しては「ありがた」と思いこそすれ、行政が大規模干拓に固執したため防災面の改善が半世紀近くも遅れた被害者だという意識はない。清貴さんは「自分を被害者にとらえて、展望があるでしょ



森山漁協の解散記念碑。右側には、ムツゴロウとアゲマキの像が建つ。

ムツゴロウとアゲマキの彫刻

んは憤慨する。

森山漁協の解散記念碑

の脇には、ムツゴロウとアゲマキ(ナタメガイ科の二枚貝)の彫刻が建立されている。そして、「母なりし海に感謝し、

泉の如く涌いた諫早湾の魚介類の鎮魂の願いをこめて有志により建立するものである」と記されている。ムツゴロウとアゲマキを彫刻にしてしまう

と、重々しすぎて実物の持つ愛嬌や卑近さと食い違い、何ともユーモラス

なのだが、碑文からは森山の人々が彫刻にしなくてはならなかったその切ない思いが伝わってくる。

干潟への愛着は人一倍だと、干拓農民は、みな口をそろえる。かつて干潟で、ムツゴロウやアゲマキを採った経験を語り出すと、干拓農民たちの表情は途端に柔和になる。森山町の干拓二世の親睦会は、「ムツゴロウ会」という。だから、「バカゴロウ」などと言われると傷口に塩をすりこまれたような気がするんですよ」と前出の沼さんは言った。

干拓農民の暮らしの変化も含めて、閉め切り前後の諫早干潟を撮り続けている写真家の富永健司さん(六〇

歳)もこう言う。

「諫早湾の閉め切りで一番寂しい思いをしているのは、干拓推進の旗を振った農民自身ですよ」

清貴さんは、もう一方で水門を開けるか否かだけが問題になっていることも不満だ。有明海をどうするか、その中でこの干拓をどう位置付けるのかという本質的な議論をするべきだとも言う。

だから、昨年までは諫早干潟保護運動に尽くした故山下弘文さんの提唱していた有明海沿岸の関係者が一堂に会して話し合う「円卓会議」にも通じる独自の構想を描いていた。

ところが、有明海漁民の大多数を占める海苔漁民が実力行使に訴えたと三月一三日、農水省は工事の中断を決めた。漁民を強力な支持基盤とする自民党の古賀誠幹事長ら政治家も夏の参院選を意識して、水門を開放して海苔不作の原因調査をすべきだと言いつつ出した。干拓反対の世論が高まる中、マスコミも干拓を望む農民の主張を形式的にししか伝えない。

「これは数の暴力ですよ。『円卓会議』に基本的には異存ないが、今は無理でしょう。水門を開けるなら水門の上に座り込んで断食デモやるね」と清貴さんは覚悟を語った。

写真撮影/筆者

ななおとしひこ・一九五七年生まれ。ルポライター。「干潟と暮らし」をテーマに本誌「干潟をゆく」シリーズで全国の干潟の現状を報告中。